

望まない妊娠の結果生まれた児及び母親に対する入所型施設での援助

これまでの研究の到達点

明治学院大学 松原 康雄

1 研究課題

望まない妊娠の結果生まれた児及び母親のケアについては、さまざまな施策が考えられる。そのなかで、母子ともに援助を提供できる母子寮の社会的意義は大きい。また、法外施設ではあるが母親と子どもの一時保護、緊急保護をおこなっている諸施設も、母親に安全といやしを与え、子どもとの生活について自ら展望するための援助をおこなっている。

望まない妊娠であっても、子どもを産む選択をした、あるいはせざるをえなかった母親が一時的に生活や育児について援助を受け、将来について積極的な生活設計をたてる場の提供は、母親のみならず子どもの育成にとっても重要であるばかりではなく、このような形態での妊娠の再発予防、子どもへの虐待防止といった観点からも意義がある。そこで、母子寮と法外女性保護施設とをフィールドとして、そこでの援助提供の実際を明らかにし、援助のシステム作り及び援助方法の検討をおこなうこととした。

2 研究方法と対象施設

上記の研究課題については、研究テーマ全体に関わる援助システムにおける入所型施設（特に母子を対象とした施設）の位置づけ、利用者の状況と生活・養育課題の明確化、当該施設で提供される援助プログラムの検討、利用者を含めたプログラムの評価といった4つの方向からアプローチできるだろう。今年度は、このうちの利用者の状況と生活・養育課題について事例研究によって明らかにすることとした。

具体的には、都内のS母子寮、および横浜市内の女性保護施設（法外）のM寮における援助事例から、望まぬ妊娠で子を出産した事例を取り上げ、それぞれの寮内での援助、関係機関のかかわりについて、また該当すれば退寮後について、ケースファイルの閲覧、職

員からのヒアリングを主として検討をおこなう。可能であれば、後者については、市内母子寮への転居者をフォローアップする。

3 事例研究の結果

(1) 女性性と母性性

検討の対象となった事例では、当該児童の年齢が低いために、母親自身の生活課題や養育課題が浮き彫りにされることとなった。そのなかで、母親の女性性（自分の将来の職業選択にかかわること）と母性性（母親自身が母親としての役割をとれないでいる）とは、援助の具体的課題となっていることが明らかにされた。このことは、旧来の「母子一体」という生活パターンを援助提供者側が押しつけることへの警告ともなっている。

(2) 児童の発達保障

事例では、育児に対する意欲の減退や育児力の脆弱さが浮き彫りにされている。したがって、当該施設での養育支援とペアレンティングが必要不可欠である。

(3) 関係機関との連携

援助は、当該施設内で完結するものでもないことは明らかである。特に、望まぬ妊娠から出産に至るプロセスからのストレスについて「いやし」を提供する場合、経済的援助が必要となる。この点で、福祉事務所による生活保護の適用が課題となる。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1 研究課題

望まない妊娠の結果生まれた児及び母親のケアについては、さまざまな施策が考えられる。そのなかで、母子ともに援助を提供できる母子寮の社会的意義は大きい。また、法外施設ではあるが母親と子どもの一時保護、緊急保護をおこなっている諸施設も、母親に安全といやしを与え、子どもとの生活について自ら展望するための援助をおこなっている。

望まない妊娠であっても、子どもを産む選択をした、あるいはせざるをえなかった母親が一時的に生活や育児について援助を受け、将来について積極的な生活設計をたてる場の提供は、母親のみならず子どもの育成にとっても重要であるばかりではなく、このような形態での妊娠の再発予防、子どもへの虐待防止といった観点からも意義がある。そこで、母子寮と法外女性保護施設とをフィールドとして、そこでの援助提供の実際を明らかにし、援助のシステム作り及び援助方法の検討をおこなうこととした。